

準因果作用子とは何か

郡司ペギオ幸夫 (神戸大・理学部)

自己組織化や創発という概念は様々な分野で使われている。しかし局所的相互作用について因果的に記述しながら、創発という概念を擁護するには、自ら記述すると同時に、その記述が根底から覆される可能性—フレーム問題的様相—に、開かれていることを受け入れなければならない。創発とフレーム問題は、一つのコインの表裏である。したがって、創発、進化、起源について語るには、因果律とその徹底した外部との調停関係について解説せねばならない（しかし、もちろん、自己組織化や創発を扱う自然科学者は、そのポジティブな面のみをとりあげ、ネガティブな面を無視する）。

因果律の徹底した外部をどのように扱うか。そのヒントになる概念装置が、マニユエル・デランダがドゥルーズの生命理論を論じる際、中心的に論じた準因果作用子である。彼は特定の因果律を一つの双対空間—アジャンクション—によって規定する。その一つの例はガロア理論における方程式と解の双対性である。デランダは、自然科学の最終到達地点とは、たかだかアジャンクションであり、これに対し、双対空間の多様性—双対空間を成立させる文脈の次元こそが、ドゥルーズの構想した哲学の見通すべき軸であるという。

現象にとって重要な概念装置は、この因果律—アジャンクションと、準因果作用子との重なるところに出現する現象だ。

ドゥルーズを理解する鍵の一つは潜在性—現実性の軸であるが、これは通常、可能性—必然性（結果）と誤解されてしまう。それこそが、実はアジャンクションであり、双対空間を成すものである。そうではなく、可能性—必然性の軸と、準因果作用子の交わる場所に、潜在性が開設され、ここから現実性が縮退する。したがって、潜在性—現実性の軸は、因果律と準因果作用子との共同作業としてのみ成立するものである。

しかし準因果作用子とは何か、について、デランダは明言していない。また実は因果律と準因果作用子の邂逅についても、彼は新たな知の地平の可能性といいながら、自分では深入りしないと述べている。

準因果作用子について、本講演ではアジャンクションに依拠して、それが何になるか提案した。第一に、アジャンクションが力学系における直積とべきの双対性のとき、準因果作用子は非同期的時間として定義された。この描像は、群れのモデルにも構想された。双対であるが故に、その一方のみを考えればよい。しかし、状態を決定する関数と、関数を決定する関数との双対性は、準因果作用子を構想することで、崩れ、或る因果律における関数の決定と別な因果律に関する状態の決定が斜交し、いたるところで、両者が必要となる。それは群れの時間を、未来へ進め、過去に戻りながら構成していくモデルとなった。ほかにもクリプキのクワス・プラスの懐疑論、ラフセット、アリのランドマーク形成におけるポイント論理とオープン論理のアジャンクションにおいて、準因果作用子がどう構想されるかが示された。それは、明らかにポスト複雑系の理論的転回であり、脱構築の再生であると考えられる。